氏　　名　王（オウ）　志（シ）　英（エイ）
学位(専攻分野)　博士（人間・環境学）
学位記番号　人博第130号
学位授与の日付　平成13年3月23日
学位授与の要件　学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻　人間・環境学研究科人間・環境学専攻
学位論文題目　命令・依頼表現における中国語と日本語の対照研究

論文調査委員　（主査）教授 内田賢徳　教授 山梨正明　助教授 東郷雄二　教授 平田昌司

論文内容の要旨

本論文は中国語と日本語における命令・依頼表現を比較対照し，それぞれの言語において命令・依頼表現にかかわる文法現象を詳細に分析したものである。

第一章では命令・依頼表現を研究するにあたって考察すべきモダリティーに関わる意味論・語用論・発話行為論などの研究を概観し，本論文の立場を明確にし問題提起をしている。

第二章は命令・依頼表現の発話行為的側面に着目した語用論的考察である。命令・依頼表現を規定する要素として，指示内容・利益・負担・支配力・社会的距離をあげている。それに基づいて，一般に命令・依頼表現と称されているものを機能に従って分類しなおしている。命令文は，聞き手の側の選択の余地のない「絶対命令文」と選択の余地のある「相対命令文」に分け，依頼文は，話し手の要求を表す「要求依頼文」と聞き手の利益になる「勧め依頼文」に分け，加えて「勧め文」というカテゴリーを立てる。そして「利益関係均衡性の修復」が命令・依頼行為にとって重要であることを明らかにした。発話以前には均衡関係にあった利益関係は，命令・依頼行為をすることにより不均衡になるが，命令・依頼表現によりそれを修復するというものである。

第三章は中国語に焦点を当てて，同じ動詞を二度重ねるいわゆる「動詞の重ね型」の機能を分析した。動詞の重ね型は命令・依頼表現によく用いられ，従来穏やかな命令を表すとされてきた。本論文では動詞の重ね型は不定量を示し「部分完了」を表すアスペクト的価値を持つものであり，文法的なマーカーであることを主張している。「部分完了」とは，動詞の表す動作が部分的に行われ，その量は不定で，ある段階までは終了するが目標点まで達したかどうかは問題にしないアスペクト形態である。このような部分完了の特性により，動詞の重ね型は反復・習慣や「～してみる」という意味を生じる。もともと中国語の動詞は単独では動作のみを表し意味的な目標点を持たないものが多い。動作開始の起点はあるが終着点はなく，なんらかの限定を受けなければ境界のない無限定な意味を表す。一方，命令表現は相手になんらかの動作を要求するものであり，動詞のあとに結果補語を付けるか，さもなくば重ね型を用いることにより量化を施す必要がある。本論文では命令・依頼表現に見られる動詞の重ね型は，上記の基本的価値を基盤として語用論的に丁寧さという意味を付与するストラテジーとして用いられていることを明らかにした。

第四章ではいわゆる形容詞の命令文を取り上げている。従来から中国語には形容詞の命令文があると言われてきた。ただしこのとき「一点儿」という要素を付加することが必要である。本論文では先行研究を批判的に検討し，中国語には形容詞の命令文というものは存在せず，それと目される形式は動詞が省略されたものであり，極めて場面依存性が強いという主張を展開している。またいわゆる形容詞の命令文に必要な要素とされている「一点儿」について，参照点を表すマーカーであることを明らかにした。これば「現在の状態よりももう少し」という場面に依存した暗黙の比較を表し，形容詞を用いた命令を可能にしている。また命令文においては，「一点儿」は最小限の量を表すところから，聞き手への命令・依頼を軽減化する働きをし，語用論的に丁寧な命令・依頼を表す効果を生んでいる。

第五章では命令・依頼表現に用いられるモダリティー副詞を考察している。具体的には日本語の「ぜひ」「必ず」「くれぐれも」「どうか」「何とか」，中国語の「一定」「千万」を比較対照し，それぞれの使用に関する典型性条件を明らかにした。

第六章は中国語のいわゆる語気助詞「吧」と日本語の終助詞「ね」の機能の分析に当てられている。中国語の語気助詞「吧」は従来「相談，提案，要求，命令，賛成」などの意味を表すとされたり，婉曲な依頼を表すとされてきた。本論文では「吧」は話し手と聞き手の認知状態に関わるマーカーであり，話し手が事態を部分的にしか把握しておらず，確定的結論に至っていないこと，その結果として聞き手の判断も考慮するという意味を表すとした。このように聞き手の部分的参与を表すという意味から，場合によっては命令・依頼において丁寧な表現につながる効果が生じる。つぎに日本語の「ね」については，神尾の「情報のなわばり理論」の知見を取り入れ，「ね」は話し手と聞き手の共感（empathy）を表すマーカーであることを主張した。この共感という概念はふたつの下位概念に分かれる。ひとつは話し手と聞き手の情報の共有状態に関するものであり，もうひとつは話し手と聞き手の発話の場に関するものである。このように共感という概念をふたつのレベルで使用することにより，「今日はいい天気です｛ね／？φ｝」のように，一見情報価値のない無内容な発話において「ね」が必要とされることを説明できるとした。

論文審査の結果の要旨

本論文は中国語と日本語における命令・依頼表現とそれに付随する言語事象を多角的に考察したものである。日本語には「働け」のような動詞の命令形の活用があり，ある発話を命令であると認定することが比較的容易であるが，中国語にはそもそも動詞の活用がなく，ある発話を命令と認定するには語気や語用論的考慮が重要な役割を演じる。本申請者は発話行為としての命令・依頼をまず語用論的に考察し，「丁寧さ」（politencss）と言語形式の関係を分析し，中国語と日本語における丁寧さのストラテジーの違いを明らかにした。命令・依頼表現において重要な役割を演じるのは「利益関係均衡の原則」である。命令は相手に動作を要求するものであり，語用論ではFTA（face threatening act）とされている。相手のfaceを脅かす言語行為には語用論的配慮が要求されるが，その配慮は話し手の聞き手に対する支配力・社会的関係と，要求行為のもたらす利益・負担に依存する。本論文では要求に伴う聞き手の負担が大きいときには，それを緩和する言語手段が丁寧さにつながること，また要求が話し手の利益になる場合でも聞き手はそれを実行することで精神的満足を得るなどの裏利益があり，全体として命令により生じた利益関係の不均衡を回復する手段が言語的に講じられることを明らかにした。

中国語では命令文に同じ動詞を二度用いる重ね型が使われることが多く，穏やかな命令を表すとされてきた。本論文では動詞の重ね型は不定量を示し「部分完了」を表すアスペクト的価値を持つものであり，文法的なマーカーであることを主張している。「部分完了」とは，動詞の表す動作が部分的に行われ，その量は不定で，ある段階までは終了するが目標点まで達したかどうかは問題にしないアスペクト形態である。このような部分完了の特性により，動詞の重ね型は反復・習慣や「～してみる」という意味を生じる。もともと中国語の動詞は単独では動作のみを表し意味的な目標点を持たないものが多い。動作開始の起点はあるが終着点はなく，なんらかの限定を受けなければ境界のない無限定な意味を表す。一方，命令表現は相手に何らかの動作を要求するものであり，動詞のあとに結果補語を付けるか，さもなくば重ね型を用いることにより量化を施す必要がある。本論文では命令・依頼表現に見られる動詞の重ね型は，部分完了という基本的価値を基盤として語用論的に丁寧さという意味を付与するストラテジーとして用いられていることを明らかにした。本申請者は部分完了という概念を重要視しており，今後中国語の動詞アスペクトを解明する上で重要な鍵となる概念であろう。

また形容詞の命令文に随伴する「一点儿」という要素は，形容詞を動的化する機能を持つと言われてきたが，本申請者はLangackerの認知言語学の概念を援用し，この要素は参照点（reference point）を表すマーカーであることを主張している。中国語の形容詞命令文は多く場面に依存し，「現在の状態よりもより～」という比較の意味を背後に含意している。「一点儿」はこの比較において参照点として機能し，形容詞命令文においては最小限の量を表すとした。この結果聞き手の命令・依頼を軽減化する働きを持つことになり，穏やかな命令を表す効果が生じる。「一点儿」の一次的機能はあくまで参照点を表すことにあり，このマーカーがないと命令文で用いられた形容詞の程度を特定することができず，結果的に指示の内容が明確にならないとすることで，「一点儿」が形容詞命令文で重要な働きをしていることを明らかにした。

次に本論文では，中国語の語気助詞「吧」と日本語の終助詞「ね」の機能を分析している。語気助詞「吧」は依頼文で用

いられることがあり，婉曲な依頼を表すとされてきた。本申請者は「吧」の基本的機能は，話し手が事態を部分的にしか把握していないという認知状態を表示することにあり，その結果として話し手の判断だけでなく聞き手の判断の共存を示すとした。このため聞き手の一方的な利益になることを勧める場合，「吧」を用いると聞き手に断る余地を与えることになり，必ずしも丁寧な依頼・勧めにはならないと論じている。日本語の終助詞「ね」については，神尾の「情報のなわばり理論」に立脚し，「ね」は話し手と聞き手の共感（empathy）を表すマーカーであることを主張した。この共感という概念はふたつの下位概念に分かれる。ひとつは話し手と聞き手の情報の共有状態に関するものであり，もうひとつは話し手と聞き手の発話の場に関するものである。共感という概念をふたつのレベルで使用することにより，「今日はいい天気です｛ね／？φ｝」のように，一見情報価値のない無内容な発話において「ね」が必要とされることを説明できるとした。「共感」の概念に未だ精緻化の余地は残るものの，従来の「ね」の機能の分析に新たな提案を行ったものとして評価できる。

上記のように本学位論文は，語用論を中心としながらもアスペクト標識のような文法機能や，語気助詞のように話し手と聞き手の認知状態に関わる現象まで視野に入れ，命令・依頼表現の仕組みを解明したものであり，言語学の研究において高い価値を持つものである。また本学位論文は人間と環境・認知の関係を解明するために創設された人間環境学専攻環境情報認知論講座にふさわしい内容を備えたものと言える。

よって本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また，平成13年２月20日，論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果，合格と認めた。